

川柳の権証

最高權威の月刊柳誌
 人生勉強的標識燈

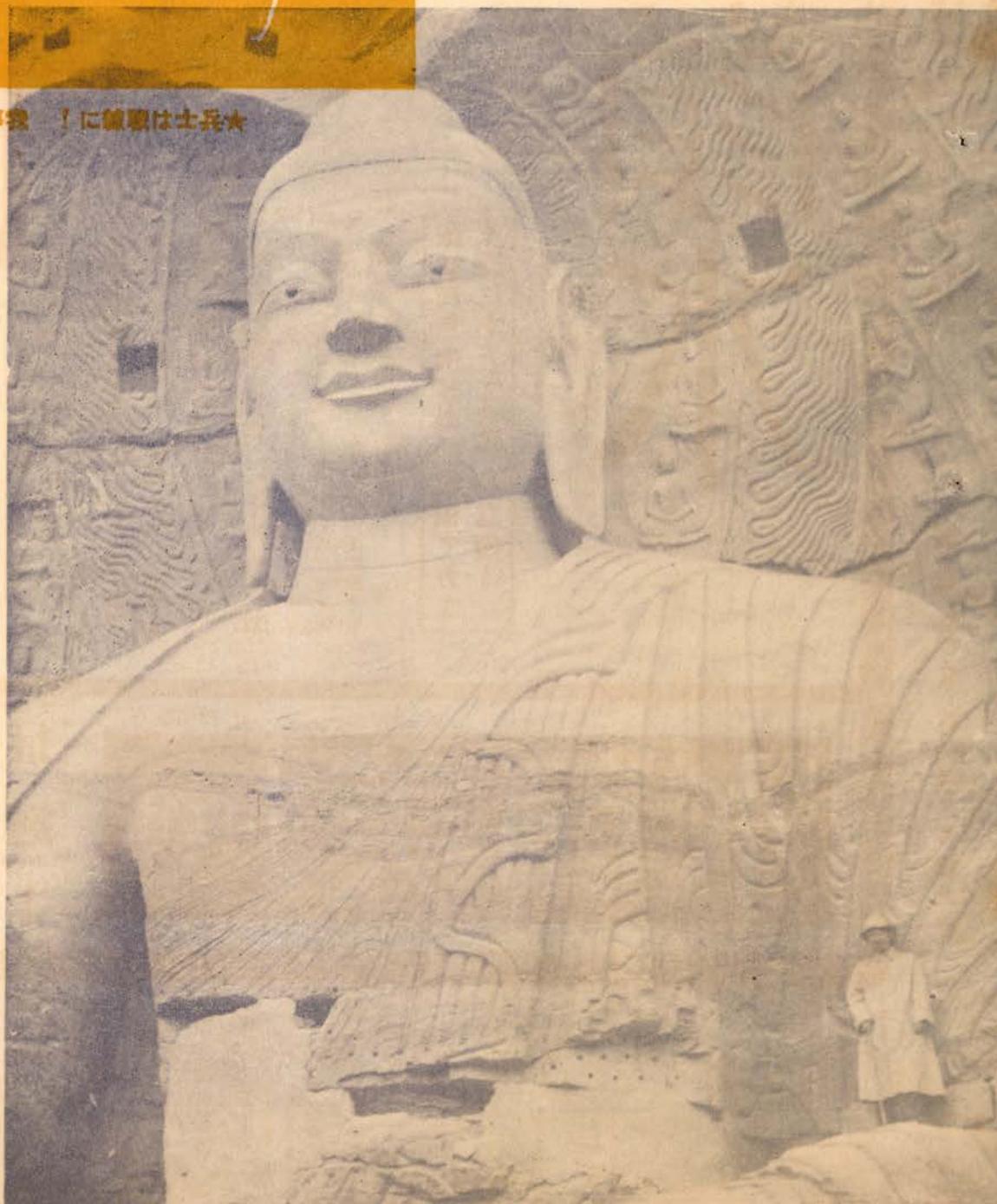
林 生 路 郎 ★ 主 宰

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

二十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十四年八月十五日發行 第十六卷第八號 毎月一週十五日發行

美

（見聞風神神馬圖） !! に被鏡は等鏡 ! に鏡取は士兵★



187

號八第 卷六十第
 行價日五十月每



灼熱の戦地へ!

感謝の慰問品を

研究された三越の慰問品は、戦地で必ず喜ばれます。
荷造、發送も完全に承ります。六階東館・慰問品賣場



週休の三越

八月より毎月「月曜日」休業

営業時間午前9時—午後6時

髪の美は
げに日本の
姿なり



フケ・カユミを止め白髪・若禿
を防ぎ明朗な青年美を創る



伊豆椿香油本

伊豆椿香油本

大槻彩芳園

大
阪

三越

高
橋
麗

★川柳勇士の隨筆★

戦線より

蚊

南支 酒井美知夫

便所はとりわけ蚊が多い。だから用を足す時は一ト苦勞だ。煙草を一本つけて這入る。吸つては下から後ろへ煙りを廻はす。だから一本の煙草が灰になるまでには用をすまさればならん。

マラリヤ蚊

マラリヤが流行る、軍は豫防に大車輪だ。マラリヤ蚊五匹捕へた者はサイダー一本やるとの事、サイダー一本十五銭だから、蚊一匹三銭にあたるわけだ。一匹早速捕へた。まさしくマラリヤ蚊だ。斑點がある。「オイ、この蚊をほかさんやうにしてくれよ」と將棋盤の上へ置いた。今度見た時蚊はなかつた。掃除にでも散つたら

だらう。

「一匹捕つたから朝から煙草一個(つはもの三銭)よけいに喫つてしまつたんだが」とは第一線も朗かだ。

慰問品

Kに大きな小包が届いた。開けて見ると菓子屋の見本の様に菓子一色だ。

「オイ、みんな喰べろよ」

當のKさんはあまり好かん様子、K

さんの家はお菓子

屋さんだ。道理で道理で。

夜路

「内地へ歸つても、もう怖くないね。敵の屍の傍で寝たりしたんだから」

とはIのやつ、出征前まで夜路が怖わかつたらしい口振りだ。

川柳雜誌

八月號 目次

表紙寫眞

……(大同・石佛)……岩崎柳路 梅本秋の屋

武玉川三篇研究

……(三)……森 東魚……(一〇)

戦線より

……酒井美知夫……(一)

川柳横町

……不死鳥……(五)

川柳仁義

……高橋亞鈍……(六)

街に住めば

……高橋かほる……(四)

評川柳一卜筋

……水谷鮎美……(二)

貝卸

……岡田某人……(九)

近作柳禪

……麻生路郎選……(六)

川柳塔

……麻生路郎選……(三)

同舟近詠

……諸家……(三)

不朽洞近詠

……麻生路郎……(一)

役人

……小林不浪人選……(五)

集路一

……正本水客選……(五)

各地柳壇

……社關係の人々……(五)

後記

……(一〇)

川界展望

……(四)

川・協

……(四)

川維案内

……(九)



不 朽 洞 近 詠

麻 生 路 郎

山中湖畔にて(七月廿三日)

分讓地 富士は遙かの空にあり

生々 莊

襲ね着で聴くはうぐひすほととぎす

見はらしをもう外人に奪はれて

貸ボート逆さの富士がくづれたり

東京某氏 値上りを待つ杭と知れ

蘇峰翁邸

雙宜莊墨痕淋漓富士に譜す

狸分讓 籠坂峠越えんとす

ゴルフ場富士はクラブの尖にあり

別荘の隅へ陣どる富士の客

山科の一燈園を訪ねて(七月廿日)

托鉢のその前身は借りだらけ

法喜の 嘘に放れた姿を見

月まどか一燈園に来てゐます

子を棄てゝ來た筈 一燈園の夜

合掌をされて視察がてれてゐる

托鉢といふ法もあり 生きてゐる

生駒山上青年道場にて(八月六日)

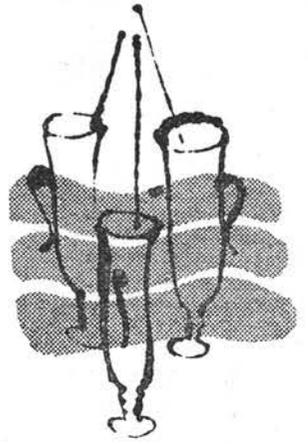
飛行燈大阪を見せ奈良を見せ

飯は斯う炊けと道場月明り

道場へいそぐ親子の半ズボン



炎熱下に於ける 戦線・銃後 柳友の御健闘を 祈ります 川柳雜誌編輯局



月川柳一ト筋

某人・鋭々・素人・豆秋
鮎美・おさむ・亞鈍・丹路
蔑乃

丹路—それぢや、ぼつ〜月評を始めませう。此の間、路郎先生と逢つたとき、もう少しレペルを上げて批評せよとの事でしたが、しかし奥さん！、初心者向きにといふことになる。と少々考へさせられますねえ！

豆秋提出—近作柳樽

曾根崎著あ出家かと書いてある
小川静観堂

豆秋—この句は、ああ、家出かといふ中七、あれで此の句が躍如として生きてゐると思ひますね。警視廳とか、警察署などでなしに、大阪の大玄關にある會根崎署で着き立つてゐると思ひます。——まあ、この位で……

某人—一種の名所川柳ですね。言葉が妥當でないか知れないが、まへ、雑誌に出てゐたやうな名所川柳ですね。ああ家出かといふところなどに曾根崎署ともつて来たところ……

豆秋—さうですね。然し地方の人には判り難いでせうねえ。

某人—静観堂氏は大阪の人ですか？

素人—別府の人でせう。

丹路—古い人ですか？

素人—柳歴は古い筈です。曾根崎署は家出の事務に馴れてゐるといふところですか。それで軽く出でゐるといふわけですか。

丹路—後世の東魚さんや蛭子

さんなどが、曾根崎署など、研究されるんでせうね。

（路郎註。小川静観堂氏は陸軍軍醫大佐。第四師團から北支に派遣された方。別府の小川三猿堂氏は目下廣島在住でこの句主とは別人である。）

某人提出—近作柳樽
夢などを氣にしてなるかかけの膳
某人—あの—どういふかな句全体から女性としての立場とか氣分が奪々と感じられる。たとへ作者の署名を消しても女性の句であることが判る。それが此の句の力だと思ふ。大体、今までの川柳は男性の作る句で充滿してゐたのが、そこへ女でなければ作れない句と、いつたところが此の句の功績だと思ふ。

某人—光耀會といふ女性の會がありましたね。

ればどうしても作り得ないといふ句をふち込んで欲しい。さういふ意味で、此の句を提出します。

丹路—ハハハ某人氏はフェミニストやな。

某人—女性川柳に就て一くさり件の如しだ。

丹路—女性作家として、奥さんから何か……

蔑乃—畑田よし江さんは女性にしては理知的な人ですよ。

素人—女性でなければ、といふそれ程までに私は感じませんかね。

某人—ところがね、男は男として水臭い氣が手傳んでねえ……

某人—影の膳など道具だてが据つてますね。

某人—今出てゐる句はね。鋭々さん！

よし江さんの句ですがね「か」が脱字になつてゐるんで。夏向き蚊が出ない方が可いんですが。（笑聲）

丹路—奥さん！どうか。

蔑乃—此の句では、まあ、某人さんと一緒ですねえ。

某人—光耀會といふ女性の會がありましたね。

蔑乃—ええ。此の頃では葉櫻會といふのがあります。貴志子さんの句は一寸男性的ですね、

うち、貴志子さんの句ではクキリストも釋迦も盲目の世を終りクが一番、好きやわ。

丹路—女性川柳はそれ位で、僕一つ提出しませうか。

大慈大悲觀音堂の雀の巢
芝田 靈子

丹路—此の句、非常に面白いと思ふんですけれど、或ひは川柳的な餘りに川柳的な作爲とも見えて、いけないといふ見方も一旦はしたんですが、よく讀んでゐるうち、さういつた點から一歩出てはゐないかと感じたんです。作者が雀の巢に對しての愛着を僕は心よく受けとつたんです。——まあ、その程度です。

鮎美—えー、これは丹路さんらしい見方であつて、私も往年靈場巡りをして雑誌にもよく句を載せたのですが、斯ういふ境

地は、本當に體驗した場合にのみ、見上げたところの雀の巢に光が射してゐるやうに思はれます。やはり、此れも川柳に於ける一端の開けたかたとして背ける句だと思ひます。

某人—此の句で問題になるのは結局、言葉の重み、前半の言葉の重みと後半の言葉の軽さ、そこに對照があつて、もしや路氏が、そこに幾分危懼を覺えたのは、それやア、その言葉にひつかつたんぢやないかしら。

丹路—そこや、そこや、その通りや。

某人—僕なども、かう思つてしませうか。

るんだが、此の句は此の句で立派に一人だけ出来る句だと思ふ。大体、靈子氏の出でゐる五・六句とも、僕の行き方とよく似てゐるんで氣持が悪い位なんだ。（二・三肯定の聲あり）最初僕が提出しやうかと思つた位です。

××—相當古くからの作句者らしいね。（誰の聲か速記者聽洩した）

某人—僕より先輩だとすれば僕が似てゐるのかも知れない。（某人、嘯ぶく）

鮎美—兎に角、提出して良き句だと思ひました。

丹路—印象批評から科學批評に入つたわけですね。一つ、句の向上といふ點から辛辣にやつて戴ければ先生の意に叶ふと思ひます。

某人—辛辣にやるには個々では辛いから、一般論でやりませうや。

蔑乃—谷心府さんのクつぱくろの通り路だけ開けて留守クこの句は平凡なやうだけど田舎の風景が出てますねえ。

某人前の靈子さんの句が對照で生きてゐるのに對し、この句は内容で生きてゐると思ひます。

蔑乃—この句は全般に重みがあるのと違ひます？

某路—それは個性の相違ですな。

豆秋—リズムなど、良いですな。



鋭々提出川柳塔

四十の戀は巻紙に書く

岡田 某人

鮎美—ぢや一つ、某人さんの句でね……。

丹路—一寸さきに、某人さんから聞いたんですが、ク生ビール皆喋つてるクの句はク生ビール皆喋つてるクで疊句になつてゐるんださうです。誤植ですか。

鮎美—さうでせうね。

腹乃—原稿には、確か疊句になつてゐなかつたやうですよ。某人—えつ!! そうですか、却つてこの方が良いかも知れません。ケガの功名か。

鮎美—私の提出句に戻らして戴きますがク四十の戀は……クは面白い句だと思ひました。もしも、私に戀心が現在あるとするなら(御承知の通り私は四十才です)確に私を詠まれたる感があります。私はこれまで、筆不精ですが本當に先方に對し、氣が濟まない時は巻紙に向つて心を落ちつけて書くのです。ところで、酸いも甘いも皆知りつくした四十の戀はとキメつけて巻紙に書くとは結んだ重厚性が良いと思ひます。主観句の客觀に匹敵して、線の太い句です。それから、或ひは十四字詩のならばとして少し餘韻に缺けてゐるきらひがあります、あながち私を某人氏は見えてゐるのではなくて、氏のホルモンの見方なのです。體驗せざる四十の戀はこんなものかなと、この句を口ずさみ乍ら實は、いろくの場面の想像を逞ましようしてゐる次第です。

です。

おさむ—同じくク四十の戀は川柳塔を通讀してまづ一番最初に一寸横道に入りますが、水客さんのク足袋少しきつく女は旅に出るクと共に一番印象に残つた句でした。まして、「四十の戀は……」自分が二年程前に作つたク三十の戀に便箋などいらすくといふのと思ひ合せて自分のまづ幼稚さが省みられ、その餘りにも本能的な卑しさが句に現れ過ぎてゐるのに較べてこの「四十の戀は……」は非常に品よく言ひ表はされてゐるのと、廣範圍に言つておられる十歳違ひの年の功には敬服してゐます。

丹路—鋭々さん、一つ。鋭々—今の點に就ては同感ですな。豆秋—ぢやもう次に移りませうか。丹路—それともう少し料理しませうか。某人—亞鈍! 何とか言つて呉れ。亞鈍—つまらんね。うますぎて續に觸るんだ。

丹路—確かに、某人氏にはさういふところがあるな。鋭々—今の句とは違ひますが先程のクビールの句は面白いと思ふんですが、井泉水氏の句にク月明るくて歸るクのとは全然情景は違つてゐますが、非常に簡潔で、その時の氣持といふものがこれで盡されてゐると思ひます。川柳として斯ういふ行き方の句を最初から作るといふ事は、誤り易い弊があるんでせうけれど、いろくくと深く作句されるうちに、かういふ風な句が出てくるといふ事は自然な純粹な氣分といふものをよく現してゐるやうに思はれます。確かにこれが、それなれば一番良い句かといはれると、問題でせうけれど一つの行き方だとして面白くみて居りました。

某人—此の句で、實は自分では下にク喋つてるクといふ下五をつけたつもりのものだつたんですが、印刷されたのを見るとそれが無い。ところが、中七だけぢやんと生きてゐる。僕自身びつくりしてゐる。

此の句を作つた時の話をする、あるビヤホールで一人ぼつちで飲んでゐたんです。周圍がみな喋つてゐる。事實はそれなんだが、僕の……どう言つて可いか、川柳的な技法としてどうしても仕方がなかつたので喋つてると重複したところが、恐らく淨書する時に、偶然、脱字になつた。これはフロイド先生に診察してもらふ必要がある。此の句から受けた教訓に餘分なことは言はない方が可いと云ふことなのです。それで脱字した僕にサン・キューといふだけなのです。丹路—鋭々さんの提出句ですか? 鋭々—今のはク四十の戀のついでに出したんですが、提出するんでしたら……。

鋭々提出川柳塔

眞剣になつて吠えても小さい犬

妹尾八九満

の文字から、即ち眼から入つた印象といふものは何だか、只それだけの風に見えるんですが、これを讀んでゐますと、非常にその小さい犬が好ましい感じがするのと同時に、もう一つはこの句の情景を離れて、ある一種のアイロニカルな教訓を感じ、その中に閃く氣がしましたので此の句を提出した次第。それに就て別段に、全体の句については餘り考へてきて居りませんので皆様の御意見をききたいと思つてゐます。

豆秋—私も今、小さい犬を飼つてゐるのですが、(失笑)前月號に出てゐる死なした犬と違ふんですか? と質問の聲ありいや今度又飼つたのですと答へて)この句を讀んで實際微笑ましい感じがします。眞剣になつてゐるなつて効いてゐると思ひます。鋭々—犬の心理状態が、これよく判りますね。豆秋—眞剣に吠えるでなしに眞剣になつてで良いんですね。鮎美—一方考へると愚直といふ氣がしますね。飼主か何んですか、さういつた立場の人が見た場合の本當の犬の事ですかね? この句はまた小役人のぶじよく、といった風にもとれますね。おさむ—この句は犬そのものでせう。某人—犬そのもので小役人の感情移入ぢやなく寫生だ。鮎美—それはそれですけれど……。某人—その意味で隙があるね。

鋭々—それは川柳家だからといつた目でみるからでせう(同感の聲、二・三あり)

腹乃—妾、丹路さんの句の……!

空の果などあればとてあればとて 奥村 丹路

腹乃—この句、二様に見られると思ひます。此の世に住みながらいつも現世を離れたやうな空想的な事をばかり考へてる人の悲哀にもとれ、それと又反對

に、この世の中に棲んで居ながらそんな架空のものにわづらはされて何になるか、つといふ意味にもとれます。然し、妾は始めの方に解釋した方が餘情が深いやうに思はれます。皆さんはどう思はれますかしら。

鮎美—これや、現在を禮讃してゐる意味……。腹乃—それでは、あとの意味ですか? 最初、ふと考へたら、先の意味にとれ、あとでゆつくり考へ



パーマネット

大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル

山口倫子 経営・電南 992

B.7圓 A.10圓

- ・シャンプーン
- ・セット
- ・付属

ると、……。

丹路—問題になつて来たなア
—しかし僕は實は懺悔の意味で
先の方ですな。

靄乃—ネエ、やつぱりさうで
せう。妾、すべて、あとにスー
つと残る句が好き。

某人—餘情がね……。

靄乃—此の句は、しかし主視
的な句で、誰でも判るといふ句
ぢやないですね。その作者の氣
持に入つてみなければ判らない
讀む人が、作者と同じ氣持に入
つた時でなければ、何かあるん
だな、といふ程度で、讀み過ぎ
てしまふと思はれます。説明を
する句でなく各々讀む人の感じ
で價值の決まるものと考へます
な。

鮎美—僕は上五と中五で、作
者の氣持が讀みとれますね。
丹路—生ビールのと同じやう
に……。

靄乃—生ビールとは一寸違ひ
ますね。こつちは、繰り返して
空を示してゐるでせう。

某人—デョッキ一杯だけ、と
いふのと。(笑聲)

鮎美—靄々さんの仰言つた通
りですが、空の果まであればと
てで、下五のあればとは見て
残して置いた方が可い。

某人—この句は、併し讀者の
空讀みするところだ。
鮎美—奥さんのいゝ見所です
ね。

某人—それや、さうですね。
靄々—奥さん！ 同舟近詠と
は？

靄乃—川柳協會の役員の方
を不朽洞會員と別にしたのです
尤も不朽洞會員で川協の役員を

兼ねられた方は川柳塔の方へ入
れてあります。

某人—同舟近詠の渡邊曉童さ
んのク熱の手に吾が手をもとめ
給ふなり々の句ですが、かうい
ふ場合に自分のことを言ふのは
恐縮ですが、大樓君が死んだと
いふのを知つて——研究會に出
るまで知らなかつたんですが
——びつくりしたんです。句は
讀んだら讀んだだけのものでは
……非常に結構だと思ひますけれ
ど、それだけ一寸。

おさむ—川柳塔になりますか
先に一寸言つたク足袋少シクが
どうも好きなので出さして戴き
ます。

おさむ提出—川柳塔
足袋少シきつく女は旅に出る
正本水客

おさむ—この句の文字の配り
方がスムーズなると、女が旅に
出てゆくまでの女の細まごまし
い仕草が、女でなければ出て來
ないところを微細に見てゐる。
兎に角、言ひまわしの、すつ
と出てゐると、女が特に良家
の女といふのでなく、何だか、
理のありさうな——勝手な考へ
方ですが——この出てゆくを色
々に想像してみたいといつたと
ころからこの句を提出したので
す。

某人—この句の女は今仰言つ
た特殊な意味づけなしにでも一
般の女として立派に生きてゐ
る。

言ひ換へれば、小さすぎる程
の白足袋をきつちり穿いた女心
が充分出てゐる。特殊の女とい

ふところへゆくまへに一般的な
女といふものが先に出てくると
思ふ。

豆秋—私も同感。この句を脚
本化しない方が、この句の新鮮
味があると思ひますね。



靄乃—とにかく身の廻りなど
キツチリした疝性のつよい女性
ですネ。

某人—女の人はさうぢやない
んですか？
靄乃—妾など、そんなことあ
りませぬね。

丹路—旅に出るといふので……
靄乃—妾、旅に出ても、餘り
めの方がいいわ。(笑聲)

某人—大体水客君には女の句
が多いんです。
某人—足元に靴點を置いてゐ
るところは、或る種の階級の女
を想像しますね。

某人—旅といふことで、その
緊張ぶりを大きく見せてゐる。
丹路—足袋は、女の人は一番
始めに穿くんでせう。

靄乃—妾は、一番、あとで
す。(笑聲)
某人—長襦袢を被て、それか
ら穿きますね。
鮎美—歌舞伎では一番あとで
す。
靄々—一般的な女でなしに、
用意周到な女が出てゐます。
某人—それは、外へ出てゆく
時に、用意周到な女が、一般的
な女とみてゐるんです。僕は……
靄々—妾は、女概念の相違

ですネ。
某人—見方で、いろ／＼違ひ
ますね。
靄々—しかし、うまいところ
を把んでゐますね。

丹路—もう別に御意見御座い
ませんか？ なければ一般論に
入りませう。出来れば句を組上
りにせて……。

靄々—亜鈍さん！ 提出句は？
亞鈍—けふは速記で忙しい
マ、御勘辨下さい。
丹路—うまく逃げたな。(哄
笑)

總評—一路集、各地柳壇
より提出

水谷鮎美句(一路集、軸吟よ
り)
麻生路郎句(阪大川柳會中
より)

自由律俳句—川柳
靄々—私、少々申上げて置き
たいのですがね。一路集の鮎美
さんの軸吟の中で夏の句々おた
まぢやくしがいちにんまへにな
るを見るクが全部假名で、爲さ
れたのも非常に考へられたと私
は思ひます。先程も話しました
が井泉水氏の自由律俳句など
こう云つた傾向が澤山詠まれて
ゐます。

俳句は申すまでもなく、どち
らかと云へば情景以外の句は少
いが川柳はその反對に、客觀的
でなく、何かそこに、もつと人
情的な内容が生れてゐるわけ
ですが、最初の春の句々郊外の窓
から母の影うれし秋の句のク
妻の膝まるし虫啼く夜の靜かク
などは自由律俳句としては、こ

この通でないまでも、同様の行
き方をしたのが多いです。
鮎美さんのこの傾向に就て御
感想を受け給はりたい。
鮎美—私は、餘りさういふ方
面に通じて居りませんのでよく
は存じませんが、私自身は何の
技巧もなく、感ずるまゝ、讀ん
だまででして、今言はれまして
始めて感じた事ですが、私のゲ
ルウプ以外の人からも川柳と俳
句の違いはどう違ふか、の問ひ
に對し、それにもお答へしてゐ
るわけですが。又俳句をやる人か
ら御尋ねになる事ですが、私
は、どうも俳句が作れないので
す。それで俳句と川柳は拋物線
を畫く境地にありはしないかと
思ひます。
やはり、形式が變つてゐても
私の作るものは川柳以外にあり
ません。靄々さんの仰言つた事
に非常に感謝してゐる次第です
が、他を見ない私の心ですから
強いようですが、これ以上お答
へするほかありません。

で作つてゐます。
それで別段、川柳が好いか悪
いかでなく、又これが川柳です
か？ と御訊ねしたものでもな
く、かういふ句を作られた傾向
を御訊ねしたまでで、只今の御
返答で大變結構に思つてゐます
鮎美—それにこの句は私の實
感でしてね。丁度田植時でした
し。

豆秋—新しい俳句、眞實一路
——いはゞクロス・ワードのや
うな文句の組み合せでなく、そ
の眞を把むといふ事で、先生が
こゝに書かれてゐる如く「いの
ちある句を創れ」で知らず／＼
眞實の點が一致したものでせう
靄々—路郎先生に訊くと、柳
俳國境の句は川柳家が作れば川
柳で、俳人が作つた句は俳句だ
と、いつも言はれますね。

丹路—何か話題がありません
か？
亞鈍—先生の句から、何か喋
れないかな。
某人—言ひませうか、ぢや……
句の冒險性にめざせ

某人—阪大句會に出てゐる先
生のクちんぼこを母清淨の眼で
見たりクだが、これは僕の友達
で暫くの間川柳をやつてゐた男
だが一般に川柳は面白くないと
いふてゐた。その後、この句
を出して見せたら、全然頭が下
るといつて參つた。

この間、九天君が歸つて來た
時に話したんですが、それや本
當だと思ひますね。それで、こ
ゝから一般論に入りますが、大
体川柳が、もう少し冒險をやつ
て欲しい。この句などのちんぼ

この通でないまでも、同様の行
き方をしたのが多いです。
鮎美さんのこの傾向に就て御
感想を受け給はりたい。
鮎美—私は、餘りさういふ方
面に通じて居りませんのでよく
は存じませんが、私自身は何の
技巧もなく、感ずるまゝ、讀ん
だまででして、今言はれまして
始めて感じた事ですが、私のゲ
ルウプ以外の人からも川柳と俳
句の違いはどう違ふか、の問ひ
に對し、それにもお答へしてゐ
るわけですが。又俳句をやる人か
ら御尋ねになる事ですが、私
は、どうも俳句が作れないので
す。それで俳句と川柳は拋物線
を畫く境地にありはしないかと
思ひます。
やはり、形式が變つてゐても
私の作るものは川柳以外にあり
ません。靄々さんの仰言つた事
に非常に感謝してゐる次第です
が、他を見ない私の心ですから
強いようですが、これ以上お答
へするほかありません。

こなどに遠慮してはいけない。もつと無茶でも可いから、これ位以上のことを言つて欲しい。それでもこの句は立派に生きてゐるし、川柳ばかり作つてゐない人達でも頭が下る。——さういふ意味から、餘りに川柳的な境地から抜け出る必要があるんぢやないか、結局一つの雑誌に一萬句載るとして、そのうち眞に、びつくりする句は何句あるか。それは各自の胸に手を當て、反省して欲しい。成程一方では雑誌の使命から言つたら、句を一萬位掲載するのも當然ではあらう。しかし、その一句か

二句の眞に頭の下る句を措いてあとの九千九百九十何句に川柳を甘くみてゐるのではないかとと思ふ。僕達は川柳といふ殻をやぶつて、一遍、素裸になつて



事ではない。斯くして興亞建設の大業がなるのだ。
★同じ南支でも没食子君の方では、蝦が非常に澤山とれて安いので毎日々々蝦の天賦羅ばかり喰べてるそやうな。南支と云



町横柳川

★南支の第一線で闘つてゐる白峯君の書信によると、一日に三度茄子の菜で三十日もブツ通してゐるそやうな。これでは敵兵の外に茄子とも食うか食はれるかの戦ひだ。笑ひ

つても廣うござんすの口だな。
★本社の八月の例會で里十九君とかはる君の對話があつた。吉本興行部のお膝元島の内生れの御兩人だけに、微に入り細を穿つ千日前の話が漫才ハダシの興味を持つ。「あの隣りに井筒といふうらおん屋がおましたな」「左様く」「うちのおばんに、あそこどうどんを喰べなやとよく云はれたもんだす」「そやや、どうしてだす」「あのう、どんやの使つてる井戸は昔千日前で曝らし首を洗つてゐた井戸でそれを、そのまゝ使つてゐたんだす」と云つた調子で、出席者の中には生れてゐない頃の話まで出た。
★喰べること以外に熱を持たない霞乃女史が近ごろ珍らしく電車の中で、讀書をはじめた。曰く「地方自活の話」曰く「豫算の話」、その次ぎはあんまり面白くないが「政黨の話」を讀むのだそやうな。

★眼の悪い夜王君、會社を休んで寝轉んでゐるが、寢てばかりもあらぬので一錢のひよこを買つて、丸三月のうちに堂々たる體軀の名古屋コーチンと白のレゴホンを買つてあげた。ところが雄ばかりなので、更に雌を二羽買つて玉子を生ませる算段をしてゐると、頑童君が訪ねて来て、あれ位大きくなつたら、もう潰ぶしてもよからうと葱を掲げて來そやうなので、自分で育てると喰べる氣にはなれないが、この暮れには一羽位置さねば義理も悪るいしといふ顔つきをしてゐた。
★喰べることばかり書いたが美根子女史は大のみつ豆黨で年中喫茶店で、みつ豆を喰べてゐる。美根子さんが黙つて椅子についても、みつ豆が卓上に運ばれる。大した信用を賣つたものだ。
★この埋草もすこぶる甘いところでペンを投げる。



募集句 一路集

役人 不浪人選

政變のうわさ役人落つけず 耕朗
お役人豫算きつちり使ふなり 巨人
小役人切られた首を持て餘し 照波
恩給を貰ひ鶏飼ひ始め 紅多呂
役人の子供なかなか負けてゐず 半休
融通のきく役人は喜ばれ 房子
退職をして役人は世を悟り 松太樓
お役人時計通りに飯を食ひ ライト
役人の態度をくづす電話なり 双虎
官舎街夫人はみんなさうざます ぎん
役人の口べた人に信じられ 神樂
宣誓をさして役人の聲となり 北海
去る者は去り官界に廿年 不水

待遇は下より上に厚くなり 抱逸
役人の家庭八百屋へぞぐ拂ひ 春巢
御役所を退けて役人子に笑ひ 彌生
役人に道理で勝てぬ事もあり 九呂平
規則だけ守つて役人今日も無事 一龜
役人となつて異國に住みなれる 斗風
役人となつて故郷に遠く居る 同
往來を眞直ぐ歩くお役人 みづほ
役人の子供故郷を知らぬなり 同
歡樂の夜へ役人の大きな眼 水虹
役人の影に戦く密輸入 同
役人の妻に淋しい日がつゞき 曉童
役人が乗る乗合が混んでゐる 同
役人の型でこもり持歩き 水客
お役人氣質と言ふが物を云ひ 同
役人が大分占めてる朝のバス 青風
正確に役人朝の刻を行く 同
役人の老後を計る趣味を持ち 葉光
役人の眼鏡つめたくと光り 同
役人に叱られさうで吃るなり 同
役人は酒の席にも順があり 文庫

役人が町内會の隅に居る 同
中元を役人何故か突き返し 同
(五)お役人ボーナス前に首にされ 登美夫
(五)小役人威張り散らして煙草 神樂
(五)お役人妻へ眞屋思ひ付き 一龜
(五)役人の潔癖人に容れられず 斗風
(五)恩給に近く役人瘦せてゐる 水客
(人)お役人髪の手逆氣を使ひ 照波
(地)役人をやめて味ふ人間味 春巢
(天)役人の民間入りは羨まれ 春巢

ピンポン 水客選

ピンポンの打球のあとの、ポーズ 半休
大劇へ来てピンポンの小半日 双虎
ピンポンの音屋上は晴れてゐる 青風
洋装の軽くピンポン勝續け 照波
ピンポンの球は垣根の花にそれ 一龜
球みんな破れてピンポン嬉しい日 久枝
ピンポン台背に優勝は撮される 耕朗
ピンポンは社長の勝つた音で済み 水虹
濃茶出す妹がゐるピンポン台 神樂

ピンポンも今日出来る白衣の兵 夢女
ピンポンのよく伸びちぢむ手の動 北海
ピンポンを取巻く晝の若い聲 ぎん
ピンポンへ強氣になつた女事務 斗風
ピンポンへ高女出と云ふ強い球 巨人
ピンポンの三バウンドをたゞきき 曉童
ピンポンになると給仕は負けてゐる 謙南坊
軍務公用ピンポン場のマイク鳴る 紅多呂
看護婦のピンポン蝶に似て動き みづほ
ピンポンにも飽く二人はソーダ水 不水
ピンポンに勝つて女はリンゴむく 同
ピンポンに勝續けてる色眼鏡 春巢
湯の宿のピンポン汗を嬉しがり 同
(住)ピンポンをあなたも煙草負けて 葉光
(同)ピンポンの音に四五人寄つて 文庫
(同)ピンポンの音に四五人寄つて 春巢
(同)チヨカ／＼とピンポンが強いて ライト
(同)ピンポンへちとむかひの音まで 同
(同)團體で来てピンポン場を占領し 紅多呂
(同)ピンポン台海にも顔ばかり みづほ
(軸)ピンポンの窓に匂ふは沈丁花 水客
ピンポンの二人なじまぬ母若し 同



近作柳樽

麻生路郎選



綾太郎もぎきで月のドラム罐 北支月原宵明

皇軍の下婚禮もつゝがなし 同

月が出て故郷の話になつて来る 同

故大樓さんへ

陣營の夢にも立たずそれつきり 同

南進五度一線(四句)

敵を追ふ冀南の曠野灼けつくす 同

たばこ一服東西南北麥畑 同

短か夜の夢はサソリに醒まされる 同

屯ろしてここは廬生の夢の跡 同

イエースかノーか笑ふ髪を撫で 同

兄ちやんが走るんで走る次男次女 同

古椅子三年午睡の骨も覺えたり 同

夏の夢眼鏡が落ちるここぞさめ 同

夕顔へ暫らく美女の目が涼し 同

のすかのされるか噛み付いて見る 同

まごまりかけてたばこ忙がし 同

ヒスの發作へ猫もかしこし 同

純綿の浴衣うれしく肩にかけ 同

奥さんの足音にちる無駄話 同

防空演習雜感(二句)

鮮人も自分の國ミ云ふ護り 同

團員が過ぎたスキツチひねる音 同

興亞記念日(二句)

持ち味を見せて娘等化粧なし 同

東洋を建て直す日の鮭の味 同

父の顔知らぬへ戦死言ひきかせ 同

張家口 小川靜觀堂

地平線撮影の大河桃代

いつち辛かつた蒙古包の夜の明

もつみやれ後ろの方で言ひなき

ざれ見せなこ子供の貯金あつて見

蘇聯機を廢品回収の數に入れ

戦亂も有つたであらう娘々祭

坪幾何ミ聞いているだけの事

好い聲の方の田植は樂に見え

肋骨あはれ洗濯板に似て

麥笛のリズム幼き頃を戀ふ

聽診器しばし患部を離れない

朝顔や母は辨當詰てゐる

薯の葉のいや／＼をする俄雨

谷本朱雀君近く

極樂で今頃母ミ水いらす

不孝者人事欄まで汚すなり

膏藥をめぐつてやつて肩をほめ

窓口で丁稚主人の名で呼ばれ

幼顔ざれが姉やら妹やら

不參者の辨當を幹事持てあまし

出征の後は團服引受ける

蟲籠の聲に更け行く天の川

九度の熱オボロゲ蟲の音を聞けり

クレオン畫汽車はレールを離れて

一人寝のさう轉ばう蚊帳の中

ピンポンを上手に負けて女中無事

さう變化するかも知れぬ水枕

竹廣島縣 西野みづほ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



川柳人義(一)

「俳詩」誌上の卑劣性

高鷲 亞鈍

「俳詩」七月號の、露旅男と
か申す匿名氏の「川柳雜誌」に
與ふ、と題する一文は、氣狂
ひの文章にしては幼稚な筋道
をたて、「川・雜」五月號の
巻頭言一つの抗議に對し、
反駁めいたことを言つてゐる
察するに和田博士の玄關番で
落第ばかりしてゐる頭の悪い
青書生の小癪にも肩怒らした
低劣極まる愚論でしかない
僕は見た。しかも、「川・雜」
の方では署名こそなかつたが
巻頭一頁全部に堂々の陣を張
つて出でゐる故に、その主宰
者、麻生路郎なるは、明々白
々であるに反し、「俳詩」誌上
に於ては、六號雜記の隅つこ
で、しかも卑怯な匿名など使
つて鬨討を狙ふといふことは
そのこと丈でも川柳人の仁義
をわきまへない。否人間の風
上に置けない唾棄輕蔑すべき
行爲でなくて何であらう。尙
又その鼯鼠の尻の如き蕪雜非
禮な記事内容を許した和田天
民子の非常識に到つては、い
やはや呆れ果てた次第である
こゝで一言、斷つて置きたい
のは、僕は何も「川・雜」を最
負目にみてばかり言つてゐる
のではない。柳壇のために、
公平に考へて言つてゐるので
あつて、誰が聞いてもそれは
肯ける問題であるからだ。和
田天民子が、どれだけ豪い入
間か僕は知らない。然し、「一
つの抗議」を暗黙のうちに承
認し、前月號まで、裏表紙の

廣告「俳詩特選集」となつて
ゐたのを「名句特選集」と訂
正し、天民子應の「俳詩特選
集」に俳壇晶の作品を今月號
に限りオミットして、自らの
非を更めた點は流石にと一應
見上げもしたのだが、あゝい
ふ露旅男と假稱する乾兒を手
先に使つて、自身は知らぬ顔
の半兵衛をきめこみ、人の道
の教祖みたいな、表面だけの
呪文を唱へて、裏面では醜猥
な行爲を敢へてするのは、
どうにも感心出来ないではな
いか。大體、僕はおかね／＼和
田天民子の柳壇に對する主張
に同感であり、僕の川柳感と
も一致する點があつて、秘か
に天民子の業績に敬意を表す
者の一人であつたわけである。
然るに、昨今の猛烈な暑氣に
當てられ、どう頭の調子が狂
つたか、「俳詩」問題となると
徒らに誇大妄想を喚起し、「一
つの抗議」にも指適してある
通り、川柳も俳句もチャンポ
に考へ、うどんとマカロニは
起源が一緒だからうど・マカ
と提唱するといつた式で、俳
詩と唱へてゐるのは飛んだお
笑ひ草である。しかも、自作
とか、「俳詩」同人達の作品
を(それは結局川柳のほか何
ものでもないが)俳詩と稱す
るのは勝手であるが、他人の
川柳・俳句を混記して、これ
を俳詩と呼稱されるに至つて
は全く狂氣の沙汰と云はれて

城頭へ此の日の丸を立て、來い
 同 京 城 古川照波
 秋風にほつ息つく菅の笠
 同 大阪 尼崎方正
 非常時さいふのに禁酒咽喉が鳴る
 同 大阪 藤森小雅子
 奥行はあれだけの家濱通り
 同 大阪 藤森小雅子
 英租界威信と共に討死ぬ氣
 同 大阪 藤森小雅子
 窓口にトレモロ揺れる夏の宵
 同 大阪 藤森小雅子
 常習犯今日もあの手で無代でのり
 同 大阪 藤森小雅子
 屑買ひの斤に五厘の利も明し
 大牟田 高田抱逸
 スフとも銚後の汗を吸ふ浴衣
 同 大阪 金田松壽
 ソーダ水むくくむくさ入道雲
 同 大阪 金田松壽
 寝轉べば蠅もひるねをしてるらし
 同 大阪 金田松壽
 年會へ飲手計りが好く揃ひ
 大阪 堀毛一龜
 かりそめにも犬よりましな此の俺だ
 大阪 津路紅多呂
 暑さにはなれてるますこ瘡我慢
 堺 駒井昌坊

貝 卸

岡田 某人

月曜日のせいで立て込んで
 ゐる治療所の椅子で齒科の順
 番を待つてゐるうちに胃が痛
 み出した。汗が出て、氣が遠
 くなる程。雑誌も放り出して
 しまひたい位。齒はとつくの
 昔に痛まなく、唯何かを充填
 するだけなのだ。背中から腰
 へかけての鈍痛をうんうんこ
 らへながら齒科の手術椅子に
 掛けて口を開けてみなければ
 ならないなんて、實におかし
 な話ではないか。

＊

女なんて、自分で造つた幻
 影と渡り合つては悲劇を製造
 してゐる。物を考へてゐると
 きつと不祥をせまくり出すこ
 としかやつてゐない。それが
 キモノの工面ばかり。

だがこの幻影との格闘は必
 ずしも女ばかりのやる事では
 ない。

＊

ペンとインク。あゝこんな
 もので精神を料理しようなん
 て、まるでピンセットで幽霊
 の足マメをつまもうとする様
 なことだ。

＊

自分の句がよみ上げられて
 ゐるのに浮べてゐる人間。こ
 んな人間をみてむしやくしや
 する人間。どちらもどちらら
 しい。

＊

藝術を墮落させるものは妥
 協である。その妥協をさせる
 ものは金。どんな立派なもの
 を作つても、それに對して誰
 も何も與へないとしたら、全

生ビールその誘惑に打負ける
 大阪 多田一波
 反英の叫び巷にあふれたり
 大阪 北野明美
 ほろ酔ひに武装のメッキはけてゐる
 朝鮮 崔宗錫
 新婚の雨へうれしい傘が来る
 大阪 樽井翠花
 縁日のあかりをさけた螢籠
 東京 森本秋子
 當てもない夜店へ姑誘ひ出し
 大阪 花柳蘭子
 蝶一つ春を遅れた花に寝る
 兵庫 石川ひさみ
 八巻は客呼ぶ聲になつて晝
 大阪 馬起花蝶
 陣營が揃へば敵の影が消え
 堺 野島神樂
 バスガール疲れをぬぐふハンカチフ
 大阪 吉田湊万
 内職に暑さ忘れて精を出し
 大阪府 大島石艸
 不器量を氣にせぬ服の水鏡
 大阪 日出花津子
 さん底の暮し希望を持つ信者
 堺 野島夢女

然妥協の要がなくなり、従つ
 て、より高い、あるひは獨自
 なものが現れるに相違ない。
 勿論作り手は減る。だが作り
 手の減るといふことは、藝術
 自體に對して毫末も影響を與
 へるものではない。吾も吾も
 と着手するもの、それは藝術
 でなくつて企業である。――
 實に藝術的」といふ言葉の、
 太いまやかしてあることか。

＊

紙障子をあげると、庭がす
 かつと潤くつて、黄色い土。
 頑丈な身體と、清らかでヒ
 ラヒラとしてゐる神経。
 クリーム色のビルディング
 と、その上のキレイな空。

＊

美しいもの、美しいもの、
 問題はこれなんだ。美しくさ
 へあれば、あとはメチャクチ
 ヤでもかまはない。いやむし
 ろその方がいい。とはいひな
 がらだ、諸君。メチャクチャ
 は決して美のことではないん
 ですよ。

＊

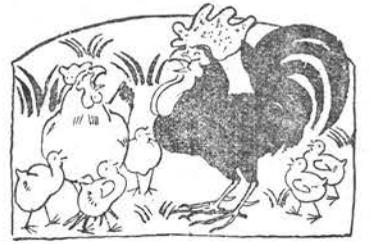
調度の少い部屋。しつかり
 と青い聲。
 抽出しない、低目の机。
 簡素で、静かな、ふちの白
 の廣い原稿紙。
 万年ペン一本。
 それから、嬉しい、美しい
 本三四冊。

＊

セロファン。あゝ何だつて
 こんな生理的なものが巾を利
 かすんだらう。月足らずの子
 供。それも死産だ。こんなも
 のに比べたら、豚だか牛だか
 の膀胱の方がよつぽど生理的
 である。(以下省略)

天民子としてある。クに對す
 る旅男の苦しい辯解は中學生
 のやうな應と選の言葉の解釋
 で答案を書き、ク俳詩の特選
 集欄は模範詩の推薦と云ふこ
 とである。次に選集といへば
 多數の詩の中から推薦詩を選
 び、之を纏めて集録すること
 で、多數の中から少數の推薦
 詩を選んだといふ意味である
 クと低能兒的の説明をして、却
 つて親分の腹の底の馬脚を露
 はしてゐるのは、ちやんちや
 ら可笑しい。雜誌上に於ては
 それでも句主の禮と他誌の選
 者の矜持に厚く、特に薦とい
 ふ字を使ひ、一單行本になる
 に及んで、選といふ不遜な字
 を使つて、句主及び他誌の選
 者を無視してかゝつてゐると
 考へられるのに對し、この薄
 ノロの答解では、多數の中か
 ら少數の推薦詩を選んだと言
 つて、一寸多數の推薦詩から
 少數の推薦詩を選んだといふ
 風に採れるが、それにしても
 多少に拘らず、又一旦推薦し
 た詩であらうと、無からうと
 他誌から選ぶといふことは既
 に無禮なる行爲であり、路郎
 氏に言はせば獨善的姑息の態
 度のあらはれである。薦める
 といふ事は兎に角、薦めた詩
 を選ぶといふことは他誌の選
 者への冒瀆であり、それ程他
 の選者より一段高い位置に立
 たうとする天民子の裏しい心
 掛けが、旅男によつて誠に明
 瞭に、正直に白狀してゐるの
 は飛んだ御愛嬌であつた。ま
 こと天民子が、薦なり選の字
 の使ひ分けに、己れの理論に
 照して眞實を持たずなら、單
 行本になる場合、特選集と何
 故しないか。と質問したくな
 る。蛙の京阪見物同様の愚は
 そのまゝ、そつくり返上しな
 ければならない。
 その他、ごた／＼と御託を
 並べてゐるが、廣が茶を湧か
 すばかりのことばかりで、殊
 更取上げる程のものではない
 些か悪態、雜言を吐いたさら
 ひがあるが、もと／＼覆面の
 男にしては才の効かなさすぎ
 る爲の齒痒さも手傳つてゐる
 堂々とするなら、堂々と論陣
 を張る用意は僕にもある。沈
 香もたかねば、尻もひらぬ昨
 今の柳壇に、露、旅男とかい
 ふ低能を手先に使はず、天民
 子御大自身出馬して、路郎氏
 と華々しい論戰の展開する口
 があればと僕は待望してゐる
 のである。

Sata Special Klinik
 呼吸器病科
 診療 佐多愛彦 加藤謙一
 螺長四郎
 院醫多佐
 入西辻北所留停町中島堂電市
 四八二八北電 町北高堂坂大



武玉川三編研究

(三二)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

(610) 川柳流れしたいに戸を洗ふ

秋の屋 郊外の小流の川柳の生えてゐる岸で、戸障子を洗ふ光景である。

東 魚 浸けはなしにして柳につないで置けば、流れが程よく洗つてくれる。

省 二 川柳の茂つて居る處に、戸障子が浸してゐるなど、一個の景趣となる。

(611) 脈のうしろを仰くお局

秋の屋 奥方が姫君の御脈を、典醫が拜見するのであらうが、「うしろを仰く」意が判明しない。

東 魚 仰くはあて字で、團扇で後から醫者を煽いでやるのだと思ふ。

省 二 仰くに苦しみ辭典を念の爲にみたら、仰ぐ煽ぐと列記してあつたので、一寸東魚氏説の如く考へてもみたが、あて字とは氣付き得ざりし。兎も角「仰ぐ」がわからぬ。後ろにも人が居るのではなからうか。

(612) 近く行姿はもたぬ帆かけ舟

省 二 向うを行く帆掛舟でこそ景に成る。岸近くでは帆を上げるにも當らない。

秋の屋 賛成。

東 魚 かう云ふいひ表はし方は、江戸座の特徴の一つに考へられる。

(613) 赤子拾ふて邪覺な物知り

省 二 あたたら僅かな物知りのために、理屈があつて、拾子に對し支障を生ずる事が出

來たのであらう。

秋の屋 拾子を拾ひ上げた處へ、物識面をした者が出てきて、この赤子の人相が善い悪いとの、批評するの歎と想ふ。

東 魚 「拾ふて」であるから、外から物知りの人が來たやうには、うけとり憎い。なまじ物事を知つてゐるので拾つたものゝ、盲目的に愛する境地になれない心持ちと思ふ。

(614) あみ笠は今の世にての隠れ笠

秋の屋 藤屋伊左衛門のやうに、今では零落して世を忍ぶ身であるから、編笠は即ち隠笠だといふ意である。

東 魚 前説に異議なし。

省 二 隠笠、隠蓑といふ、想像的に身を隠し得といふ物。

(615) 犬追ふ物にもたぬ近つき

秋の屋 犬追物に参加する武士には、相識がないといふのであらうが、之れも前句が必要である。

東 魚 隠れたる逸材が、突如として晴れの犬追物に参加出来るやうになつた場合でもあらう。腕一本猫一本で、何の知己もなく出てきた處に、一層の晴れやかさがある。

省 二 元來ならば近つきがあるべきだ。近つきがないといふ處、前句が欲しくなる。それが逸材のためなのかは、句面で十分はつきりはしてゐないと思ふが。

(616) 夫婦おろかに同じ事泣

省 二 例へば息子の死を繰返しては、老夫婦がなげとか、色々あらう。

秋の屋 貧乏世帯を嘆く場合もあり、年若い兒の無いのを嘆く場合もある。

東 魚 まことに愚に返へつた、老いの夫婦でもあらう。

(617) 宇津の谷は喰れぬ物に錢の音

省 二 宇津谷名物十團子を錢出して買ふ。(十團子の事前に評述せしを以て略す)。

秋の屋 「錢の音」の音の字に難があると

思ふ。

東 魚 通り掛る旅人が、十團子を買つて行く。小錢を腰かけなり、縁先きなりへ投出す様に置いて行く。で、錢の音と据ゑたのであらう。

(618) 愛染はあくほき守る形てなし

秋の屋 愛染明王は佛法の守護神で、三目怒視、六臂の嚴めしい姿であるが、愛染といふ名に由り、愛敬を守る神として、花柳界の人に尊崇せられ、また築物工にも崇拜されてゐる。

東 魚 小供の時、家にあつた愛染明王の繪像を今に思出すが、子供心にも恐ろしい様な像であつた。アイソメと讀むだ若い川柳家があつたから、之はアイゼンである事を申添へて置かう。

省 二 外相は忿怒暴惡、内證は戀愛染着の情を表示、愛の神である。

(619) 年季か明と重い着物

秋の屋 主家と約東の年限を勤め上げて、獨立するやうに成ると、衣服も年季者と異なり、絹物の重着も出来るのである。

東 魚 着物はキモノでは字足らずだが何と讀むのか。上方式に云へばキリモノだが、さうではあるまい。

省 二 きりもの、きりもん、と讀むより考へつかず

(620) 土産にならぬけふの託宣

省 二 今日の託宣は凶。凶では土産には

ならぬ。人或は他のものに憑つて、神託に因つて、吉とか凶とかを告げるを託宣といふ。

秋の屋 今年の稲麥は凶作などいふ、託宣を聞いては、歸村しても衆人に語り憎い。

東 魚 「土産になら」ぬが要を得てゐる。

(621) 鬼門に當る枝の我まゝ

省 二 鬼門はほかつたりになり勝ち、枝も剪定せぬ故、一層茂る。

秋の屋 俗説かも知れないが、樹木の鬼門の方に差出た枝は、他の方に出た枝より、伸長して威勢がよいと云はれてゐる。

東 魚 鬼門除けに植えた樹であらうか。さすれば木の伸びるまゝに、其方の枝は剪らずに置く事もうなづける。

(622) 柴の戸をあなつる鶴の下り所

秋の屋 柴の戸に鶴が下りたといふので、強いて輕蔑する意ではないが、その所を得ないと云ふのであらう。

東 魚 人が居るとも思はぬさまに、靜かな處であるから、鶴が下りたのを、家があるのになどつて、と寧ろ打興じてみやつたのであらう。

(623) 土蔵を建て家の息繼

秋の屋 既に坐敷を建築して後に、土蔵も又落成した故、これで一段落がつき、此の上は當分家屋を建築する必要もないと云ふのである。

東 魚 お説の如く息繼は「先づこゝで一ト息つく」と云ふ意味合であらう。

省 二 土蔵が竣工すれば、一ト通り當初の考へ丈け落着して一ト息といふところ。

(624) 精進にうそもつかれず暮遅き

秋の屋 來客に夕餉を出すのに、只今その仕度中であるなど云つても、精進料理である故に、珍らしい魚を取寄せるといふやうな、啗を云ふ事が出来ぬとであらう。

東 魚 〓お彼岸などであるか、暮遅きは所謂春日遅々の貌である。來客の場合でなくとも、内の者でも、晩飯はまだか、と云ふ場合など考へてもうけとれやうと思ふ。

省 二 〓暮遅きはお説の如く永日の事。『暮遅き日も頂上のひばりかな』。精進日には嘘を云つてはならぬ、即ち身神共に精進すべきもの、嘘もつかぬ日永なのだ。

(625) ふるい日の心かゝりは合歡の花

東 魚 〓合歡と云ふ字なり、又この特性の夜合と云ふやうな事から、此花を見るにつけ、昔の戀の日の心にかゝる事が思はれると云ふのかと思ふ。

省 二 〓ふるい心にかゝる事共が、心淋しい夜(合歡で示す)になると思ひ繰返へさる。

秋の屋 〓私の漢學の師で禮窓といふ人の、香齋昧の詩に、「娘子破瓜憶合歡、閨中長對鏡光寒」といふ句が有つた。

(626) 母は命をほめる凱陣

秋の屋 〓吾が愛兒の無事に凱陣したのを賞讃するは、所謂母性愛である。

東 魚 〓手柄より何より無事で歸つてきた事が、母はたゞ嬉しいのである。

省 二 〓母の祈願も叶つた喜び。(古句集の多くが凱陣と書かれてゐる)。

秋の屋 〓康熙字典に據ると、「玉篇」本作陳とあり、又、佩陽集、軍陳爲陣、始於王義

之小學章、按、史記作陣、非自義之始也とある。

省 二 〓幼時より馴染の論語には、衛靈公問陳於孔子、孔子對曰俎豆之事、則嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也。

(627) 夏山の汁の枝折はとうからし

秋の屋 〓夏日の山棲であるらしいが、汁の枝折も薔薇も、私は解釋に苦しむ。

東 魚 〓「枝折」と云ふのは、特に目立つ心持ちかと思ふ。夏の暑い折の汁に、青い唐がらしを夏山泊りの珍らしい氣分に見たのではないか。

省 二 〓枝折は山にかけての技巧で、汁の實が唐辛子であつた丈の事ではなからうか。

(268) 珠數きるあしたさんこしゆを買

秋の屋 〓若後家などが墮落して、昨日までも爪繰つて居た珠數を切り、而して簪にする珊瑚珠を買ふ、と云ふのではなからう歟。

東 魚 〓「珠數きる」は、珠數を捨てる心持ちであらうか。前説明解と敬服する。

省 二 〓確に名解。珊瑚珠を買つた事が判然とする。(珠數きるといふ事西鶴物にあつた記憶のため採せしが見當らず)。

(629) 味曾汁に御意の下たる若たはこ

省 二 〓若煙草は新煙草の事。煙草のみは味曾汁を吸つて毒を消す。

秋の屋 〓私には中七の「御意の下たる」の解釋が出来ない。

東 魚 〓「御意の下たる」は、「おむねのくだる」ではないかと思ふ。ギョイと讀むとテニハが足りない。前記の如く讀んでみると「下たる」がどうもまづいだが、結局味曾汁を命ずる意味と、つかえた胸の下がる意味と兩方へかけたのかと思ふ。

省 二 〓「下たる」は、「おりたる」と讀むだ、御意は御好みのあつた意。

秋の屋 〓「御意」をおむねと訓む説は如何であらう歟。能く考へてみるに、「下たる」は「おりたる」で「ぎよいのおりたる」と訓むのである。

東 魚 〓全く考へ過ぎて「おりたる」に違ひない。

(630) 薔のつらきふんて行春

秋の屋 〓薔の花が落ちて實を結び、べん／＼草になつたその上を、春が過ぎ行くと云ふのであらう。

東 魚 〓人が踏んで行くのと春が過ぎ行くのと、云ひ掛けたのであらう。

省 二 〓「つらをふむ」ので、いかにも薔の終りを示す。

(631) 等に一度もめる神宮寺

秋の屋 〓神宮寺といふのは、神社に奉仕する僧侶の住む寺院で、昔は伊勢大廟、宇佐八幡宮、鹿島神宮等に有つた。この神宮寺の僧

と、神社の神官とが、領地の境論を惹起した事が、屢々有つた故、それを「等に一度もめる」と詠んだのである。

東 魚 〓御教示を得て成程と思ふ。

省 二 〓本地無跡説により起り社僧といつた。明治維新の時に分離廢止、等にもめるとは神官と社僧とに、面白い皮肉な表現。

(632) 捨舟に木食一人雲の峰

省 二 〓雲の峰がたつ。捨舟には木食者が獨り悠然と乗つて居る。道具が餘りにも揃ひすぎの氣味がある。

秋の屋 〓如何にも道具が揃ひ過ぎてゐて、木食で無くても宜からうと思ふ。

東 魚 〓この捨舟といふのは、沼か山の湖にあるのであらう。

(633) 起請の灰もさゆのいきおひ

省 二 〓一氣にのむで義理を果し、安堵の面持ち。

秋の屋 〓句勢も剛健で甚だ佳い。

東 魚 〓白湯のすが／＼しさが思はれる。

(634) 暑き日を追廻したる夕河原

秋の屋 〓四條河原の納涼が聯想されるが、「追廻したる」が少し變である。

東 魚 〓追廻はす驅逐する位の意ではないか。

省 二 〓追廻すのだから、暑き日が追廻はされて逃げてしまふのだ。



あらゆる趣味のお稽古場

松坂俱樂部

會員募集

手はざきから興義まで
氣軽く、楽しく、御上達

お稽古
種目

- 長唄 常磐津 尺八 箏 舞 尺八 曲 八曲
- 清元 津 舞 尺八 曲 八曲
- 小唄 謡 舞 尺八 曲 八曲
- 鳴物 能 樂 小 鼓
- 華 洋 料 理 道 道 學
- 棋 氣 道 學
- 松坂レコード 吹込所

川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當

御申込は
七階松坂俱樂部
電話(代表)三〇〇番

松坂屋

大 阪 日 本 橋



川柳塔

路郎選

大阪 奥村丹路

嘘の効用に呆れたりインク壺
 高架線月へ行くならたのしかろ
 一生をかうして暮す水すまし
 海の大きさをあ嘘をつけ嘘をつけ
 悪友の電話多忙をわきまへず
 美しい女は食はむ對の鮎
 これやこの食用蛙たべさ、れ
 妻の一日時計の針を疑はず

張家口 岩崎柳路

停電に窓を覗けば小雨なり
 飲める口上海に居たさ云ふ女給
 驢馬の尾さ蠅さひねもす村はづれ
 義理ミ買収の決断鈍り部屋に居る
 流れ星租界の方へさつみ消へ

兵庫縣 寺井鋭々

バナマ帽今年も同じあたま也
 待たされる眼へ古雜誌枯れた花
 上着も取らず氷柱へ畏まり
 儲かりまつかさ鼻の頭の汗を拭き
 盛装の汗を拭くハンカチは少さし
 犬の子を買ふて散歩を切り上げる

大阪 高橋かほる

きりぎりす動の家の子さないて
 七夕の笹をまけさす子澤山
 橋毎に船頭の妻上を向き
 上高地一度お越し山を賞め

兵庫縣 水谷鮎美

煙突のけむりへたかく手をあける
 無意なりしこを胡瓜の花にみる
 猫のいねむり常套的な手段です
 福耳の妓さ逢ふてボチをきり
 母の手のうちわの風のありがたし
 夕立に雄鶏走りきて人にくる

南支 市場没食子

日英東京會談
 一揉みに現地は潰す氣であるに

注 聲明

原因が判りやもさく姉妹國

市街戦もすんで

邪摩だつたこの高層の英佛旗
 警備につけば書簡が山の様に着き
 ビール賣切れ酒保は煙草も後僅か
 東亞建設の尊き君も一柱
 雷雲に忙てたりやな野天風呂
 爆撃機憩める上を旋廻し

名古屋 吉田水車

金調査カード白紙のま、で出し
 出征の君にすまない蚊帳を吊り

姪多恵子逝く

親の慈悲輪血空しくなりにけり
 雷鳴に防空サイレン消されけり

大阪 後藤青兒

塹壕を思ひ子思ふ日の暑さ

雷を後に聞いて汗を拭き
 部隊長さなつた名譽の走り書
 ガソリンを使ひ空荷で歸される
 ブラットの悲しい顔に發車ベル

南支 宮岡白峯

應召一周年

自家用も走り敗戦國の春
 軍犬の耳もゆれてる歩哨線
 宣撫班便衣の口へさからはず
 國の母せめて赤飯でもたくか
 俸給は酒なり俺の日記帳
 亦一ツ旗がふえたり南支地圖

松本 石曾根民郎

日本ライン下り

出船いま撮れば旅めく頬へ風

犬山を歩む

白帝城ながれはるかに君が戀

白帝城後姿は友ばかり

鶴飼のほとり

さりかこむ鶉籠へ更けて妓をかへし

長良橋戀の別れを渡る妓ら

犬山に舊友山田有町君と逢ふ

なりはひをおなじうしたる膝たのし

柳ヶ瀬の盛場を泳ぐ(鮎魚)

氷水だけでおちつく廓の灯

東山動物園にて(名古屋)

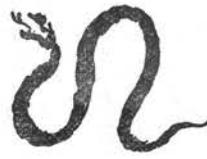
噴水へ旅の疲れのあからさま

新舞子海岸

山猿が浴びて海邊はつ、がなし

歸 宅

ふるさこの水が待つてたちさい旅



同舟近詠

勝^{かつ} 頗^は 松山 前田 五健

水なぶりきつう西日がさしてゐる
 タイピスト戀さいふ字をうつて見る
 小市民夏期講習へつかれさる
 お隣りの人数かぞへて見る西瓜
 大阪中西おさむ

旅がらす屋根の下なる灯を思ふ
 トンネルを抜けて真下に海迫る
 何の話か後の連がよく笑ひ
 鮎をみる網に光るは夏の風
 日本のお田植の笠動く
 大阪府 丸尾 潮花

中繼のラヂオへ叔父さ久しぶり
 大阪府 丸尾 潮花

失言へ母は優しい眼で叱り
 愛嬌を娘母からうたぐられ
 人情を冷やかに見るワンピース
 大阪岡田 某人

なんほでも飲む氣へ椅子をあけに来る
 アパートに年寄りひこり軸を掛け
 詩人肌何處かの借を背負つて来
 戦死につき付箋のまゝでもさつて来
 雑草に生きる生きろさ教へられ
 莫迦遣ひする身の丈へ煽風機
 生ビール麻のたもこの濡れにけり
 淋しさに堪えよ風が鳴るのなり

マツセーが出来て悪友一人ふえ
 まじ、ろがボロイ話へ邪魔をする
 兵庫 田邊 由布

ト居君を送る
 (武田尾温泉にて)
 送別のこゝろも揃ふ宿浴衣
 ほがらかな別れも君の若さなり
 尼崎 酒井 斗風

妥協した自分に腹が立つ日也
 窓へくる鳩へもカルテ見せたき日
 街路樹のみざり闘心湧く病後
 新築の蘭の陽ざしへ客があり

蓮の葉を冠つても見る河童
 水垢を落して戀の河童です
 釣られ行く魚を憐れむ河童の眼
 雨乞の騒ぎぞ知つて河童寝る
 鯉の尾の泥に河童は目をつむり
 河童いま水中眼鏡に脅かさされ
 河童消へて芦の葉風のあるばかり
 底を突く棹を危く河童避け
 蔓橋へブラ下りたい河童の氣
 河童うつかり洗濯の泡をのみ
 眞下から河童が覗く鰻籠
 遊船の捨てもの河童底を這ひ
 小判さは知らず深みへ河童捨て
 モウ秋の冷へださ河童思ひ知り
 食用蛙を河童は遠く眺め居り
 心中を河童は遠く眺め居り

甲羅干す河童へ芦の花がちる
 一雨は河童も欲しい雲を見る
 河童かき思や人間かき河童
 これ程に食つた西瓜に河童あきれ
 撫子へ或日河童は鼻をあて
 水馬演習河童寄るまいぞよるまいぞ
 川施餓鬼すんで河童の月夜なり
 馬洗ふ人へ河童は遠く居る
 釣糸へ河童は脚で觸れてみる
 寝ころんだ河童へ蛇のうるさいな
 兵庫縣御影町 長崎 柳秀

逆襲にせくこまはなしやをら立ち
 逃げ廻る廣さが支那の強味なり
 餅あみに焼けぬ先からこれは僕
 自轉車の方からかはす乳母車
 雑踏へ我が兒を庇ふ肘を張り
 お氣に召すやうにさ女逆らはす
 消火器は見得や飾りに置てなし
 朝夕に日々の行事の水を打ち
 廣島 濱田 久米雄

生活に偽りのない靴を穿く
 人間味なき云はせぬ窮屈さ
 高等を出るミ工場が待つてゐる
 病氣だけはさせぬ氣でゐる誕生日
 惨む汗動かぬ風の中のペン
 肯定をして蔭口はビール飲む
 物價物價ミ煙草喫ふてる
 今治 渡邊 曉童

陽の海の中をホロ、柿の花
 買はれ行く身の驛辨のふたを取り
 鏡台を手荷物で乗るくらがへや
 大願成就亭主をつれた禮参り
 松山 矢野 蛇の磨

朝顔にしやがんでる妓に郷があり
 さもかくも女寝る迄用があり
 海に來て青きがまゝの夜さはなり
 夕ざれば汽車の氣笛にある故郷
 ハワイ 高澤 一浪

ネクタイを結んでくれて解いてくれ
 踏みしめる大地も俺の眠る土
 明眸が映つた日から俗人だ
 夫も子も馬も捧けて刈入る、
 出る所へ出ても貸したが弱味なり



協・川

★排英川柳一矢

今や國を擧げて排英反英の叫びをあげてゐるが、麻生路郎理事長は七月十五日東京會談の當日、大阪朝日新聞朝刊社會面に排英川柳を發表して川柳報國の一端を披露された。

★俳詩問題と黙殺

青森の小林不浪人君(川協名譽會員)の書信によれば、東京訪問の際、一夕天民子主唱の俳詩問題を辯じたところが、藤元の東京では俳詩問題を黙殺してゐるとのこと、不浪人君まことに手持無沙汰であつたらしい。俳詩の名稱を問題としてゐる「みちのく」の主宰者としては當然の主張であり、東都の川柳家がいかにも事勿れ主義だと云つたところで、自分等の作品を勝手に俳句と混記轉載して俳詩と稱してゐても一言もこれに抗議し得ないことは不甲斐ないと思ふ。黙殺といふことは事によると思ふ。今からでも遅くはない。東都川柳家よ、起つて彼等の誤謬觀を打破されたい。

★「高麗」滿洲番傘併合

朝鮮代表誌として自他共にゆるしてゐた仁川の「高麗」が最近「滿洲番傘」と併合して姿を

朝鮮から消してしまつた。

かくして「滿洲番傘」が本質的に滿鮮を代表する大柳誌たる可能性があればまことに慶賀すべき事象で我等も双手を擧げて賛するに吝さかでないが、經營上相容れなかつた池田可宵君と其の他の人々が「滿洲番傘」で肩を並べて同人たることに果して永續性があるか頗ぶる疑問だと思ふ。殊に朝鮮には朝鮮のカラー、滿洲には滿洲のカラーが

切望する。

▼松坂屋百貨店の松坂俱樂部では俱樂部三周年記念事業の頗ぶる豪華な寫眞記録を刊行した。中でも麻生路郎川柳講座の川柳展並びに川柳大會の記念撮影が特に光つて川柳のために氣を吐いてゐる。
▼阿部佐保蘭君(川協理事)警防團の爲活躍されてゐる由。忙しき中にもSHKの爲努力を續けてゐられる。島紅石氏の「水とたたかふ」の英譯完成、十月

演・藝・映・畫に川柳を觀る

いろは假名四谷怪談

|| 歌舞伎座 ||

水谷 鮎美

悪友を待つ伊右衛門は傘を張り蚊遣火と行燈へ風はありはあり宅税の眼が幽霊のあとを追ひだんまりの土堤に怪しき闇迫る幽霊は西へ行く惱む伊右衛門惱みくんでお岩の笑ひ左もあらん
○ 姫 田 夕 鐘
毒薬と知らずお岩は伏し拜み添ひたさの娘心の恐ろしさ復讐の一念鏡怖がらず水門へ佐藤與茂七の聲となり

あり、兩誌は各獨立してゐてこそ生命力ある柳誌たり得るのではないかと思はれる。「高麗」の人々にして今後融合し得ざる理由を發見した場合、經營力(思想的でなくとも)に於て容るされる時には再び分裂するのではないかと思はれる。芽出度かるべき併合の時に際しこの言をなすのはいささか非禮の誇りもないではないが、これ等の言葉妻すべて杞憂たらしめるやう

▼池田可宵君(川協名譽會員)は「はんかちで拭ける暑さは知れたもの」の句を寄せられた。九月には來阪せられる由、期待して待つ。
▼好崎申仙君(大阪)は七月十七日、關西日光談山神社から句を寄せられた。「多武峯國寶もあり杉木立」

柳界展望

催

全關川柳界の各地川柳人の一舉手一投足を此展覽會でつむむる様にして皆様の御通信を歓迎する(傍)

消息

▼川柳雜誌社は七月一日午後七時から誓得寺で例會開催。▲十三日、廿七日夜六時有恒川柳會。▼二日、十六日午後一時松坂俱樂部麻生路郎川柳講座。▼廿二日夜、坂田商會。▼廿五日下午四時阪大川柳會。
▼北支派遣軍運送部隊の小川靜觀堂君は今回の陸軍大異動で大佐に進級され滿洲〇〇〇第二陸軍病院長として轉任された。
▼丸尾潮花君(大阪)の令弟竹内春坊君が七月三十日に除役歸還されることになつた。およろこび申上げる。
▼西いわを君(大阪)日本アルプスから句を寄せられた「雪溪の白さに浮いて槍ヶ岳」
▼石井白面人君(大阪)は七月廿一日、戸田孤蓬君と岡山縣の奥津温泉に清遊、「露天風呂寫眞一枚とらされる」
▼橋本緑雨君(不朽洞會理事)は白濱湯崎に遊ばれ「黒潮に浮ぶ鳥々みとれて居」の句を寄せられた。
▼毛利稔君(大阪府)へ徵膺令が下り、川柳人白傑隊の尖端を切つた。健闘を祈る。
▼和田默然人君(北京)から「昨年お邪魔した時から九一年になります」との頼りに接した。數奇の運命を辿つた同君、今は北京でナニワホテルの親爺だ。北京へ出かけた柳人は必ず

訪問されたい。

▼宮内耕朗君(嘉義)は病後を養ふために四年ぶりで松山に歸つた。或は一ト先づ台灣へ左様ならするのかも知れない。
▼正本水客君(大阪)は嚴父の病篤として八月一日夜慌だしく東上、一日も早く快方に向はれんことを祈る。
▼村松夢裡君(大阪)七月二十六日、諏訪湖畔思ひ出の湯に浸つて「この湯の香四十年を振り返り」の句を寄せられた。
▼浅野奎介君(大阪)は樺太數香に滞在されてゐる。こゝは北緯四十九度二分、國境線へは八分のところ。
▼伊良子擁一君(神戸)「解題と例句」は素晴らしい。それに對して「日の丸制定當時の逸話」

街に住めば

高橋かほる

書畫材料店で買物をしてそれを包んでシデ紙でくくり乍ら店員が大美麗御覽になりましたかと聞く。時節柄のんびりしてますね……。書畫材料屋の店員やサカイにそんな事を聞くのだと云へば味もしやしやらもありません……。

「日の丸餘話」等のあつまる所流石「川柳雜誌」である。私も適當な題目を見つけて何か書かせて頂きたいと存じます。といふ頼りに接した。君は目下「視野」の編輯に大車輪である。
▼石曾根民郎君(松本)は七月十五日、町内の青年團員總勢十五名で三日掛けの夏期旅行をされた。犬山では柳友山田有町君に會はれた由。
▼植山九天君(上海)七月中旬來阪されたか、電話の行違ひから路郎主幹に會へず、西下された。
▼多田市多樓君(下關)は七月

廿八日、長崎に向ふ植山九天君と一時間程談話された由

▼鈴木可香君(名古屋)は日本アルプスに遊ばれ八月三日「上高地から」上高地の夏を詠む人描く人「放牧場此處でも牛が草を食み」の句を寄せられた。
▼清水友帆君(大阪)八月五日石川縣小松町から「故郷もやはり暑いばかりです、小松の川柳はすつかり姿を消してゐます。しかし氣運はあります」と。「辨慶もこの濱風を聞いて越へ」

甲

▲川雜發售支部幹事淺謙公君の御令閏が七月九日午後三時四十分には永眠された。謹んで悼む。
▼大阪警察病院に入院加療中であつた川雜名古屋支部幹事吉田水車君の令姪が六月二十六日永眠された。合掌

轉居

▼黒川紫香君は大阪府豊能郡南豊島村原田一、二四五へ▼大塚五厘棒君は吳市江原町一二九へ▼奥田緑水君は尼ヶ崎市北竹谷町二丁目一〇八へ
▼宮内耕朗君は愛媛縣温泉郡桑原村東野上、淺川四郎方へ
▼吉田君は凡太▼芝田雲子君は雲之

社告

柳友交驛の暑中見舞廣告掲載方を御遠慮申上げたところが編輯費の一部にでも費つて貰ひたいと左記の方々から金封の寄贈があつた。茲に録して御厚意を拜謝する。
大島 濤明殿 中見 光路殿
橋本 緑雨殿 高橋 かほる殿
須崎 豆秋殿 永田 里十九殿
水谷 鮎美殿 酒井 斗風殿
丸尾 潮花殿 中西 おさむ殿
妹尾 八九滿殿 姫田 夕鐘殿

趣味の古本堂
鬼文堂
心をこめて
北側

老地壇

いのちある句を創れ

本社七月例会 (大阪)

七月一日 於 誓得寺

本社七月例会は一日夕刻より大寶寺町の誓得寺で開催された。蒙羅張家口から岩崎柳路君の夫人松代さんが出席され、おさむ君、八歩君、銃人君、満潮君の珍らしい顔ぶれで賑はしかつた。

不朽洞會員、北大阪支部幹事の黒川紫香君の柳話に続いて、路郎主幹の前月例会入選句の短評があつた。

兼題、席題入選句秀逸には路郎主幹筆の團扇を呈した。里十九君擔任の相撲吟披講は例によつて頗る華やかに運ばれて閉會した。(幹事)

出席者(順不同)

路郎・夕鐘・紫香・豆秋・潮花
 巨入・亜鈍・富士・銃人・李介
 八蓬・由布・斗風・鮎美・緑雨
 孤蓬・正次・寄與史・満潮・かほる
 紅多呂・素人・八九満・おさむ・風葉
 八歩・丹路・松代・葎乃・世間音
 黙平・いわを・里十九

席題「丸刈」 互選

丸刈にしてから帽子はしくなり 正路
 丸刈をするのに床屋だめを押し 富士
 丸刈りにして来た肩をたふかせる おさむ
 丸刈の重役日本主義を説く 巨人
 ウキンドに寫る丸刈なぞて見る 紫香
 父うさんのチャッキでツット目さる 豆秋

規清稿投

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
 文字を正確明瞭に記載のこと
 開催月日及場所記入のこと
 締切は毎月廿五日とす
 投稿先は本社宛

丸刈に冷たい水の心地よし 八九満
 丸刈にすれば十八かと聞かれ 寄與史

席題「高下駄」 かほる選

高下駄を履いてくぐり戸低り出る 富士
 高下駄と雨傘たのむ田舎驛 斗風
 高下駄の枝うつむき勝に來る 紫香
 高下駄で花束持った手が濡れる 紅多呂
 高下駄へ千日前は晴れかゝり 潮花
 高下駄で市場へ走る用が出来 豆秋
 子を負ふて居る高下駄へ氣を使ひ 八九満
 高下駄の程よく雨が止みかける いわを
 流連けの客高下駄のまゝで去に 富士
 高下駄で女は話付けに來る 満潮
 それが高下駄かとたづねられ 里十九
 高下駄を買はねばならぬ夏祭り 潮花
 高下駄をはいて本家の庭で會ひ 鮎美
 高下駄の銃後も同じ音をたて いわを
 高下駄を履いてひきづるくせがき 里十九
 (秀)高下駄に嫁の苦勞も判つて來 鮎美

席題「呼鈴」 八歩選

呼鈴を押しにも個性を見つけたり 夕鐘
 呼鈴の音もうれしい新世帯 由布
 三度目の呼鈴腹を立てた音 同人
 呼鈴を押しして勧誘おそれ入り 巨人
 遺言となる呼鈴のけたままし 鮎美

理整秋豆・路郎

呼鈴の用は煙草を買ふてこい 巨人
 呼鈴のある庭風が薫るなり 潮花
 催促に來た呼鈴の押へよう 鮎美
 (秀)呼鈴の留守を隣に教へられ おさむ
 (軸)ベルも鳴らず夫の靴の音 八歩

素人選

汗だくでまだ算盤が合はぬなり おさむ
 汗ふいて遅刻の詫を云ふてゐる 紫香
 汗と汗ニツコリ笑ひ合ふて晝 由布
 色街を通つて若い汗を拭き かほる
 でぼちんの汗をふきく長電話 夕鐘
 言ひ譯をすましてやつと汗をふき 李介
 表札を見上げて汗をふき直し 紫香
 此の汗を見ると出前から歸り 紅多呂
 入智慧をして冷汗をかいてゐる 世間音
 えらい汗だんなと云ふてくれた昔 夕鐘
 馬の汗ニユース映畫に光るなり 豆秋
 (秀)集金人汗をふきくお釣出し 巨人

席題「食ひ過ぎ」 潮花選

食ひ過ぎを妻は叱かりもせず介抱 紅多呂
 食ひ過ぎた子を公園に連れて行く 世間音
 食ひ過ぎへ胃散をどこへ置いた。 巨人
 食ひ過ぎてゐるのにむりに引はれ 正路
 食ひ過ぎた妓ちよつびり胃散呑み 斗風
 食ひ過ぎをおそれ食欲ちとにぶり 孤蓬
 夜泣き十杯食ひ過ぎとはいへず 十九里
 食ひ過ぎが離れ座敷で横になり 豆秋
 (秀)食ひ過ぎの眼に憂鬱な瑩籠 鮎美
 (軸)食ひ過ぎの床を女に見舞はれる 潮花

席題「駈引」 夕鐘選

駈引の男の背中たゞいととき 斗風
 駈引は晝の宿屋で寝てこまし 鮎美
 駈引の男に暗い影があり 斗風
 駈引をうたがふ様な眼に出合ひ 風葉
 駈引も言へぬ静かな女客 かほる
 駈引の電話神戸へつながれる 李介
 駈引の強い男でやせてゐる 潮花
 駈引のきつい女のうしろ向き 豆秋
 駈引をする頃酒も知つて來る 銃人
 駈引はじいわり子供からほめて 里十九
 (秀)マカランや十錢位はまき呉れ 正路

兼題「海」

鮎美選

亞米利加へつゞく海なり手ですら 八九満
 海越へて來て居る覺悟へ陽が上る 凡太
 小心へだんく海が近くなり かほる
 船頭は信じ切つてる海の怪 緑雨
 満潮の干潮のとも海も生きてゐる 夕鐘
 メガホンで呼ぶ海岸は波高し 孤蓬
 海からの風まつすぐに松をぬけ 斗風
 歸還兵海の青さに見とれてゐる 満潮
 上海へ近づくと海の色を見る 寄與史
 怒つてる様にデッキへ波が來る 潮花
 さくら貝拾ふ渚に月があり 巨人
 スマートな水着は海にはいらぬ 斗風
 微熱する瞳に秋の海しづかなり 緑雨
 海をみるだけに別荘一つ建て 緑雨
 マドロスの瞳がまんまるい朝の海 サイ
 (秀)戀をした頃ほどにない海の色 おさむ
 (軸)大聲で呼べば海原のびてゆく 鮎美
 限りなくさびしき海にしてしまひ 同人

兼題「重役」 路郎選

寢台へ社長あらゆる手を廻し 黙平
 重役がどなられてゐる現場 紫香
 重役の分厚い手から辭令が出 由布
 業績はよく重役の國訛り 亞鈍
 重役の趣味も知つてる處世術 銃人
 一睡は重役の夢藤の椅子 孤蓬
 重役へもう一度行く名刺なり 緑雨

夕立雲ふと一人居る子を思ふ
夕立に蠅がうるさい娛樂室
夕立へニーヤ裸で走つてる
夕立をついて夜行が驛を出る
夕立雲電線工夫が高く居る
夕立の夜店植木屋だけになり
夕立で隣の娘の睨見つたり
夕立の驛へ着いたり浮屠部隊
簾越し夕立のあとすがくし
雨上りあんな所に蛙の子

川 下關支部句會 (下關)

六月十日 於 半 休 居 多田市多樓報

眞劍、訓示、思ひつき、健康、洗濯
試験前子の眞劍に親も寝ず
捧げ銃皆眞劍な顔と顔
眞劍に願書を書けば手がふるい
眞劍に行く氣は支那の地圖を買ひ
眞劍になつて知らずに癖を出し
食ふ話眞劍になる子澤山
勝たん哉眞劍の眉ゆすり上げ
眞劍に頼む額へ蠅とまり
眞劍を論ずる價值のない僕さ
校長の訓示へ子等はうつつむけり
若かり社長訓示へ反りかへり
隊長の訓示へ片唾飲む兵士
訓示する人一層に恐く見え
苦手だと訓示聞く者聞かぬ者
轉勤の校長涙の訓示する
咳一つして名訓示振りを見せ
口髭を一寸氣にして初訓示
校庭でスピーカから来る訓示聞き
御訓示の趣旨は不首尾なことば
螺貝に花活けてある思ひつき
天引の貯金はたしか思ひつき
思ひつくことがあるよな初夏の海
思ひつき今日の利用で生きてゐる
思ひつき子供は子供だけの案
採用へ先づ健康を尋ねられ
健康をたゞへる様な鯉のぼり
グイタミン詳はしく知つて不健康

悪戯で困りますよと嬉しそう
健康が勝つて學業内となり
貧乏を氣にせず伸びよ健康兒
健康な男兒は居るぞ鯉のぼり
貧乏の底で健康兒が育ち
健康と健康の寄る初年兵
健康に未だ食ふと云ふ茶碗出す
子澤山らしく洗濯物を干し
洗濯が済んで入道雲が出た
熱い湯の着物盥に蚤が浮き
洗濯屋汗の匂ひのシャツで来る
スフと云ふ洗濯法を考へる
洗濯の済むのを待つて正午が鳴り
洗濯のあちらはお芋蒸す匂ひ
盥水子供の垢をみんな捨て
洗濯の盥に朝の月が浮き
風俗をそゝる 砧の音を聞く
洗濯を明日に持ち越す二階借り
責任がまだある盥に手を休め
洗濯の耳に子供の温い聲
子の母となり洗濯にめぐる四季
戦地スケッチ
難かしい戦争もある宜撫班
クニヤンと二人寫つた初寫眞
凱旋の友と別れる朝霞む
一いくさ済んで戻れば弟の死
トーチカも夏草の蔭に潜みけり
攀登り霞むウラジロ凝視する
鈴蘭の花咲き薫る國境ひ

川 塗青支部句會 (大阪)

六月二十四日 於 染料會館 淺 謙 公 報

胡瓜、男、生ビール、日本刀、禪、都會の
夏
灯に遠く胡瓜切てる台所
料理屋の胡瓜違つた味で出る
一山の胡瓜曲つたまゝで賣れ
お隣りも胡瓜を刻むらしい音
國防婦人男勝りの聲を上げ
あの馬鹿がとは云へぬなり男也
男の子男としての意地を持ち

男なり今日城頭へ日草旗
男とは油断のならぬ顔を持ち
生ビール元氣な顔がよく揃ひ
生還はみんな期せぬ日本刀
日本刀正義へ味方する光り
日露にも手柄を立てた日本刀
バナマ帽夕立に會つてみじめなり
二三日見ねば都會の灯の戀し
冷やし飴賣つて都會の隈にゐる
屋上のビール生駒の灯も嬉し
二階借り蚊帳の内らへ螢入れ
慰問品届き輝さらにする
來客に輝一寸あはてたり
輝も洗ふ餘裕のある強さ
輝をしめてゐるかはむい也
大陸へ一路輝を締め直し
無心なり白いふんどしの草いちぢり

阪大川柳會 (大阪)

於 會 議 室 丸島利生報

マツチ、大阪辯を使つた句、ベンチャラ
晝寝から起きてマツチを踏みつけ
マツチすまみサイヴィスと妻若し
人柄に似合はぬマツチ持ち合せ
マツチする指にも媚態感せられ
マツチの軸で齒きゝるほど成下り
旅先のマツチ自慢で貸して呉れ
勝手につけなはれとマツチ持ち出され
信用を落すマツチを持歸り
腹這へばマツチを取つて呉ると云ふ
自炊今朝高いマツチで焚き付ける
そない云ふたかてと娘承知せず
助かりまよと小切手頂かれ
ソーダツセ、ホンマダツセと女將云ふ
大抵におなぶりやすとツイと立ち
あんじようしときやと母親家を出
そんなことおますもんかと妓まはら
舌によりかけて堅造をおだてあげ
べんちやらと知れど女の猪口を受け
べんちやらも云はせてをば面白し
ベンチャラを聞きし浴衣着かへる
ベンチャラやまへんと云ふ世辭を聞き

松坂俱樂部句會 (大阪)

戸田孤蓬報

ズボン、丸刈、折靴、親展
半ズボンだけが動いてゐる山路
替へズボン靴を新調したくなり
青春の夢はズボンを敷いて寝る
もう伸びぬズボン十八貫一寸
三代も勤めズボンの古を受け
蚊トシボがズボンのひだにき込ませ
徵兵令公布
今日からは俺も兵士のダンブクロ
ズボンのしわ氣にして話身がい

勘定はズボンさくつてすまじとく
半ズボンバナマかぶつて鮎を釣り
要するに気分ですよ丸刈せぬつ
丸刈に合はぬカンカンかぶつ
排英の幟丸刈握りしめ
應召を期して丸刈して仕舞ひ
丸刈の當座毎日洗ふなり
丸刈に出来ぬ子供頃の傷
丸刈になつて女房を顔かせ
丸刈にきけば私は頭痛もち
日本中皆丸刈で若くなり
母の手で今日丸刈になりました
をしげなく水をあびてる丸坊主
禿げてきて丸坊主より仕様なし
丸刈がいつち元氣なハイキング
別人の様に丸刈事務を執り
集金に行き丸刈を侮どられ
應召でない丸刈が又一人
折靴に入れてゐるのは見本だけ
外交員先づカタログと折靴
折靴大切さうに置き忘れ
憎いのは執達吏より折靴
折靴法衣も共に入れてあり
折靴妻に見送られたころもあり
折靴差上げて夫歸り来る
折靴食堂車にも手ばなさず
辨當の匂ひがして折靴
京都から先は枕の折靴
女房に秘るものある折靴
折靴雑誌一冊ほりこまれ
折靴時しも夏の陽が眞上
折靴けふは女と逢ふのなり
折靴持たせて貰うて五級俵
折靴女房の様に十餘年
酔つても抱へ込んで折靴
坐つたらもう折靴あけかゝり
折靴妻のぬくみで渡される
集金の私物ではない折靴
折靴だけで男の旅がすみ
折靴はげて私はまだ雇員
微笑まぬ顔とはなりぬ折靴
證文にも云はず氣の折靴

折靴社會の裏を見て暮し
用件は云はずと知れた折靴
折靴いつか疑ひ深くなり
約束を忘れてくれぬ折靴
折靴何を出すかとみつめられ
折靴喜怒哀樂をあらはさず
折靴にしよかしよかとラブレター
親展書後は河鹿を聞きに來い
親展で来た勸誘を笑ふなり
戀ころ親展の字をなつかしみ
親展でいゝ友だちの酒の詫
親展で戰場へ問ふ子の名前
親展を切れば勘定書が出る
年頃だ親展状も来るやらう
親展に金のいる事書いてあり
親展にさあらぬ態度で封を切り
女房は親展とあらうがあるまいが
帳尻の始末をつける親展書
親展書下宿の主婦は見逃さず
親展書讀む風すきのわるい部屋
しようむない智慧しにくる親展書
親展書こんどのこも誠になり
子が出来ることを知らせる親展書

有恒川柳會 (大阪)

九文と内輪に言ふて無理に履き
足のすれ／＼の水へ月が射し
青簾ちと太い足はおかくしよ
其の足ですぐ墓詣りするつもり
健康を誇る汚れた兒等の足
賞與貰ふ時だけボタンかけるなり
ボタンがまゐるシャツ着た腹立たし
染め直しボタンの糸がよく目立ち
ボタン付け忘れた事は妻の負け
取れかけたボタン一日氣にかゝり
終電車ボタンかけずに馳せつける
所在なきボーイのボタン敷へて見
呼鈴のボタンは今日も我を待つ
寢台の下までさがす首鈕
男の子あつてボタンの用意あり
落第の友にてれてる金ボタン
卸一つで宿の女中にお辭儀する
下宿屋は誰の鈕か拾らつとき
許嫁鈕ぐらゐるはつけてくれ
とらまへて来たが鈕が見つからず
金鈕ひとりの母をだます氣か
三軒の家賃が這入る金鈕
鈕を外づしながらピルを注文す
弟の方の鈕は落ちそうな
焼香にいつち先のが金鈕
金鈕玉も三十ほどは撞け
金鈕候文はまだ書けず
勘定、ソーダ水、紙
レヂスター一緒に出され受取れず
幹事だけ胸勘定で飲んで居り
禮言つた御馳走の代取りにくる
キヤツシャーをって青春いつか過ぎ
月給へ食費何費と差引かれ
母親が戴いてとる初勘定
割勘に御立替は除外され
勘定の頃に女給は寄つて来る
勘定に行つては借りを積み重ね
昔々彼もソーダ水で氣煽あげ
待ぼけて二度目のソーダ水となり
満員は満員だがソーダ水だけの容
約束をたがへソーダへ割つて飲み

よつばし川柳會 (大阪)

アトリエの雑談となつたソーダ水
ソーダ水女三人派手にゐる
電話借るだけに入つたソーダ水
ソーダ水飲みたい顔で子は歩き
ソーダ水ベランダの端に月があり
呼んだ子が芝生から来るソーダ水
ソーダ水でも赤いのを取りたがり
ソーダ水伸びる様に子供吸ひ
待わびて飲みたくもないソーダ水
贅澤で紙衣をまとふ果報者
寄麗過ぎ紙食ふ羊とあざけられ
ザラ紙も宣傳文で御光さし
紙一枚の境地悟るに身を削り
新世帯らしく表札紙に書き
ありそふな紙燃の紙をさがしかね
原稿紙空白で春の灯がともり
年寄が紙半枚を捨てさせず
長期建設紙一枚も二度勤め

心配、台所

海荒れて心配の母神詣り
心配が過ぎた顔いろやつれやう
心配の量を額の皺で讀み
心配が解消しての太い呼吸
差向ひ先の心配何處へやら
初産の心配も無事の鯉のぼり
心配は今日もお百度踏みに行き
心配を二人で分ける仲の良さ
孝行の子は心配を笑つて見せ
物價高益々惱む台所
台所一寸のぞいて叱られる
台所里の土産で賑かす
台所のぞいた猫が氣にかゝり
新妻の笑顔が満ちた台所
台所興亞日本の鍵となり
台所妻の不馴で粥が出来
新妻が思案にくれる台所
長期戦守る一家の台所
台所せかせて豆をむかせられ
妻の留守主人のなれぬ台所

ルービヒサア

社會式株酒麦本日大

君と僕
そして
ビールと
櫻ン坊

路郎



のため
に

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店



片瀬醫學博士
「安産のために」冊子呈上

梅林醫學博士 推獎
片瀬醫學博士 監査

懸賞川柳

課題「素顔」九月十日
「組」十月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と
明記の事) 選者麻生路郎氏
秀逸数句に瀟謝を呈す
宛先 堺市出島町三五一番地
麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

大阪市住吉區帝塚山
化粧新聞社

船の旅

大陸は招く

満・支・蒙への
OSKライン

船商阪大 一呈進書内案一

／船華豪造新の周一界世

丸なちんぜるあ
丸るじらぶ

にきびとりに

美^び顔^が水^ん



ニキビ

美容薬として

ニキビ吹出物に非常によく効きますので
 大評判の薬です。ぜひお勧めしたい薬！

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗
 面後等にお用ひになるとても爽快で、ニキビ
 吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増
 しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬とし
 ても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其他毒虫でカユ
 イ時にもとても便利な薬！

此	に	吹
薬	ぜ	出
を	ヒ	物

化粧用 美顔水

最	粧	の	ア ブ ラ 顔
適	下	お	
！	に	化	